

## 自主シンポジウム 5

## これからの保育カリキュラム研究の視点を探る（2）

## —実践を土台に保育カリキュラムの構造化を考える—

- ◆企画者：立浪澄子（長野県短期大学）、師岡 章（白梅学園短期大学）
- ◆司会者：師岡 章（白梅学園短期大学）
- ◆話題提供者：風間節子（長野県短期大学付属幼稚園）、嶋さな江（元東久留米市立ひばり保育園）  
立浪澄子（長野県短期大学）
- ◆指定討論者：宍戸健夫（佛教大学）

## ◆企画要旨

「これからの保育カリキュラム研究の視点を探る」（第53回大会）では、これまでの保育カリキュラム研究を振り返り、今、我が国でどのようなカリキュラム研究が求められているのかを検討した。その結果、保育目標と実践をつなぐ具体的な通路であるカリキュラムに関する研究が、きわめて細かい状況にあることがわかった。その一方で、進歩的な試みを続けている保育現場では、カリキュラムを実践と連動させつつ、柔軟かつ弾力的に展開していることもわかった。

折しも、新しい幼稚園教育要領及び保育所保育指針が実施される中、保育カリキュラムの編成理念、手法共に見直しが求められている。今こそ、本格的な保育カリキュラムの理論的・実践的研究が急務であると言えよう。そこで前回に引き続き、再度、本テーマに取り組むこととした。

具体的には、保育者主導の実践を脱皮するために、子どもの実態を踏まえたカリキュラムの構造化をどのように進めるのかについて検討したい。

## ◆討論の意図

まず、実践を土台にしたカリキュラムづくりを進める幼稚園、保育所の事例をもとに、その成果及び取り組みの特徴を討論する。続いて、これまでの保育カリキュラムの構造化に関する研究を概観し、その成果と課題を討論する。その上で、保育カリキュラムの構造化の方向性を討論する。

## ◆問題点

- ①保育カリキュラムの構造化とは何か。
- ②保育の構造と保育内容の構造との相違点は何か。
- ③園生活の具体的な中身とは何か

## 「実践を土台にしたカリキュラム編成を求めて」

## ○風間節子

私たちは、次の①～④の方法で保育実践の見直しを進めてきた。

- ①その年齢の特徴が表れ、繰り返し遊ばれたり、他の学年にも影響を与えたりするような、「子ども(たち)

が充実した活動をしている事例」を年齢ごとに挙げる。

- ②それらの事例を、教育目標とのつながりを考えながら「保育者の意図やねらい」が明確になるように記録し、分析及び考察を行う。

- ③②を基にして各学年の保育のポイントを話し合う。

- ④③において最も重要なポイントとして浮かび上がってきた「人間関係」を柱にした教育課程表を作る。

これらの過程で一番表現しにくかったのは②における「保育者の意図やねらい」である。これが明確にならないと、活動の流れや印象に残った子ども(たち)の様子は細かく書けても、分析や考察が深まらなかった。そこで「どうして印象に残ったのか」という中身をひとつひとつ具体的に明らかにする中で、各々の保育者が無意識に持っている「視点」や、その子(たち)が何を楽しんでどのような経験をしていたのかという「解釈」の実際、あるいは保育者がなぜそのようにとらえたり、かかわったりしたのかという「意図」などを、わかりやすい言葉で表現しようと努力し合った。しかしそれは容易ではなく、書いてみては「自分(たち)がやろうとしていることを表現できない」というもどかしさに苦しみ、何度も話し合い書き直した。その結果、各々の保育者が無意識にやっている事を意識化して、それを皆で共有できたのは成果である。

また、①～③を行きつ戻りつする中で、教育目標と実践をつなぐ大切なものとしてとらえていた「充実した活動」の中身や、どうしてその時期にその経験をさせたいのかという「位置付け」が、具体的になってきた。そしてこのような「充実した活動」を支えるのは「個人の成長・人との関係・活動の質」という3つの条件であろうと気づき、以前より明確な視点を共通に持つことができるようになった。

さらに④では教育課程表づくりを試みた成果として、子ども(たち)自身の成長、人間関係の変化や、活動の様子の違いなどが3年間のつながりをもって見え始め、日常の実践の手ごたえが変わってきたのを感じている。しかし、この表でも自分たちの考えは表し

きれず、表に入らない活動がある、などの問題が残っている。そのため今後は、検討していない他の活動も分析して保育に位置付けながら、体系化の手がかりにしたい。(詳細は口頭発表と当日資料参照)

### 「保育実践で考える保育の構造(終わりのない営み)」

#### ○嶋さな江

保育実践を語るとき、あるクラス、ある一日、ある子どもの事を取り出して議論しても、職員集団や、父母との関わり、そして、子どもの育つ今、その背景を抜きには語れないということを繰り返し経験してきました。

それは、保育実践の総体は、そこにいる子ども、親、そして私たち保育者の関わりの上に成り立つ営み全体であるということで、保育の構造とかカリキュラムのことを考えるとき、園の保育を総合するプロセスの全容を明らかにしなくてはならないほど遠大なものに思え、なかなか困難であるという思いが先に立ちます。

十数年がかりで、目の前の子どもの姿、親の姿の事実から出発し、その時点での職員の総意で、そのときの到達点としての実践を総括、方針化しながら少しずつ、保育園像、子ども像、保育で大切にしたいことなど共通になるものを明らかにしてきました。

しかし、すでに、子どもたちは、育ちにくさを背負わされ、様々な形で私たちに保育の見直しを迫ってくるという時代になっていましたので、園の保育を総合するプロセスも行きつ戻りつであったり、停滞状況で、今まさに迫られることに向かって悪戦苦闘というのが現実です。

今は、その悪戦苦闘の毎日から、たくさんのことを学ばせてもらい、「徹底して子どもの側にたつ」ことが保育の中心、と思うようになりました。

でも、考えてみれば、未完ながら、保育の全体像は、とか、役に立つカリキュラムは、とか、総合活動(期の中心的活動・行事)とクラスの保育(年齢の発達)の関連は、など語り合い、立ち返るものがある、そこからまた出発すればよい、と思える安心感につながるように思えます。

いつも、今がどういう時代かを共通にし、子どもをどう見るか、大人と子どもの関わりは、など、たくさんのエピソードの中から保育者同士が学びあい、確信になるものを拾い出し、今いる人の総意で、また、ひばり保育園の保育の全体像を明らかにするプロセスを、歩み始める時が今なのかもしれません。

### 「保育カリキュラム構造化の視点」

#### ○立浪澄子

カリキュラムはかつては教育課程(保育計画)と訳され、「教育課程の編成」といえば固定的、形式的な表づくりのイメージでとらえられていた時期があった。しかし、1974年に開催されたOECDの「カリキュラム開発セミナー」等を契機として、次第に、

- ①「隠れたカリキュラム」(hidden curriculum ヒドゥン・カリキュラム)の意味も含める
- ②カリキュラムを子ども自身の「学びの履歴」としてとらえる
- ③目標・内容・教材の立案のみならず、活動の展開過程、評価なども含めた総合的全体的な過程を示す概念としてとらえる。(天野正輝2000など)

というとらえ方が広がりつつある。

保育の場においても、大筋としては、戦後より一貫して「入園から修了までの園生活の総体」(岸井勇雄1999)という理解が成立していたとはいえ、学校教育の影響は無視できず、このような概念に立ったカリキュラム研究が活発に行われてきたとは言い難い。

現行幼稚園教育要領を見ても、「環境による教育」「幼児期にふさわしい生活」「遊びを通しての総合的指導」などが教育課程編成のキーワードとなっているが、その具体的中身はまだ十分には共通理解されていない。

このような状況にあって、カリキュラムに盛り込むべき内容を明らかにして、その立案・実施・評価・再構成をも組み込んだカリキュラム編成(開発)の研究・実践を進めるのはけっして容易なことではない。

まず、幼稚園教育要領や保育所保育指針等で述べられている5領域は乳幼児の「発達の側面」に過ぎず、そのままでは実践を導くカリキュラムの構成区分にはなり得ないと言ってよい。実際には「具体的なねらいと内容」に相当する園生活の区分や活動領域、形態等を明らかにしてカリキュラムを編成する必要がある。

たとえば、園生活には個人生活と集団生活という平面的な区分があるが、それは同時に表現と受容という内と外の区分を含んだ立体的なものでもある。

さらに園生活には時間的経過があるので、活動の生成・展開・消滅があるし、繰り返しや発展がある。1日、週、期(季節)、年の時間的リズムもある。

空間的、歴史的に異なれば地域環境、風土、民族等による文化的違いも出てくる。したがってカリキュラムは本来、園内だけでなく、保護者や地域・他機関との連携のもとに編成されるものである。

このように複雑に入り組んだ有機体的構造をいかに解き明かし、保育カリキュラムを編成するかが今後の課題になってくる。